

「この人に聞く」成熟社会と建築

神戸芸術工科大学環境・建築デザイン学科客員教授
俳優
渡辺篤史



■ 「建もの探訪」へ出演のきっかけはどのようなことでしたか

1989年から始まった『建もの探訪』は、最初は観光番組でした。

沖縄からスタートして、九州、四国、本州、東京にたどりついて、13回で終わる予定でした。3回目位に、『建もの探訪』といういい名前があるのだから、公共建築物もいいけれど、建築家に依頼して夢を具現化した個人住宅を紹介しようとプロデューサーにお願いしました。実は私は趣味で番組が始まる二十年くらい前から「新建築」の住宅特集や「GA」「SD」などを愛読していました。

個人住宅にはとても興味がありました。振り返ってみると、幼いころ田舎の広い家から東京の文化住宅に引っ越してきた時の驚き、この辺から家に思いを寄せ、ずっと夢の建物を追いかけてきたのかもしれない。あえて言わせて頂きますと、この番組は私に託された試練。偶然ではなく、必然と思いたいですね。何しろ日本の（住）風景を少しでも美しくずっと思い続けていたのですから。

大好きな仕事をライフワークにできるのは幸せなことです。

■ 印象に残る住宅、好きな住宅は何でしょうか

多くの素晴らしい建物を色々な場で見せていただきました。

あげたら切りがありませんが、その中でも、印象に残るのは、東孝光さんの塔の家、安藤忠雄さんの小篠弘子邸、何人かの新人、とりわけ印象的だったのが仙田満先生の茅ヶ崎の自邸です。

茅ヶ崎の自邸はくつろぎ感のあるいい家です。将来、家が建てられるようになったら、あんな風になりたいという思いの濃い建物です。非常にシンプルでありながら哲学的で厭きの来ない建物です。周りの緑を当てにしながら、スペースは程良く動線もいい。切妻屋

根の形状にあわせた天井、南は庇を深くして、前には松がのびのびとしています。緑の間合いをとって、この家が日本の住宅のプロトタイプとなり、これが家並となり繋がって行けばいいなと思います。他方、仙田先生の作品は子供や弱者を元気にする建物が多く大好きです。

■ いい住宅とは何ですか

大樹の庭を育てるのに100年。その木を切るのに5分、そしてあっという間にさら地です。新築するのに邪魔だったのか、これは何かもったいない気がします。意識ある人であれば思い出の大樹は残すでしょう。

いい住宅は、新築でありながらずっと昔からそこにあった様な、また、使いこんでいくうちに味が出て暖かく包み込んでくれる様な、人間の営みを刻むものです。万一、住み手が変わっても素敵な家はそんなことを吸い取って、なおかつ味のある表情になります。一流の建築家の設計によるからでしょう。

建築家はいい建物を一杯つくってきました。それを壊して新築するのではなく大事にして、まちの核に何故できないのでしょうか。

■ 理想の家とはどのような家ですか

個性的であるのはとても良いことです。しかし、周りを見無視して独創的過ぎるのは良くありません。全体（ランドスケープ）をどこかで見渡して秩序やバランスを保持した建造物を創ってもらいたいものです。

ヨーロッパのまちなみなど、古い建物と新しい建物とがうまく共存しており、してはいけない色や形の暗黙の了解がある気がします。

その点、日本は人それぞれは優しく、畏敬の念をもって接しているにもかかわらず、こと建設に関してはどこか勝手に建築し町並みを崩している気がします。周りとのバランスの取れた建物を設計してもらいたいものです。

夢のタペストリーの一ピースのように理想的かつ自然発生的に出来た町並みと合わせ建設する様な都市計画が必要です。（名画の描ける）都市計画家の活躍が望まれると同時に市民の皆が目を養い、新しい建物に目を光らせる必要があります。建物は一度建ってしまうと最低50年はそこに在り続けるのですから、よほど慎重に良いものを造らないと創造の神様に申し訳ないという気持ちでいる必要があります。

■ 住宅において元気の素とは何でしょうか

高齢化が進んだロングアイランドでは、集合住宅を作って若い人たちに入ってもらったら、急にまちが元気になったそうです。きっかけは何でもいい、意識的に何かを注入する

ことが元気に繋がると思います。

この間、面白い家があったまげました。フェレット（いたち）と共生する家です。この家は、次はこう変えようと三段階ほどのプランが考えられていました。生活の変化を元気の源にして、変化に対応して部分的にリフォームをしていく。建物の完成は、実はサステナブルのスタートでもあるわけですから、少しずつ変えていくイメージづくりや遊び空間も大事なことだと思います。

■ まちづくりに望むことは何ですか

最近では緑がなくて、建物と建物が接近したトラブル間違いなしのまちづくりをしてきました。家づくりは一生に一度あれば幸せな方です。まず、美しい街並みを描いたのちに、一軒の家を建てることになったなら、皆で喜べるまちになるに違いありません。

人間は脆弱で悩みを抱え、時には元気だというように複雑です。逃げ込んで自分を取り戻すことができる場、精神的な安定感を生むスペースが日本のまちには欠けています。併せて、社会的弱者に対応したまちづくりが前提にあれば、健全者にとっても本当に楽で心地よいだろうと思います。

戦後、I・M・ペイが日本に来て、集团的記憶喪失の街だといったそうです。冗談じゃありません。歴史を要して作り上げた日本の建築文化は素晴らしいのだから、どこの国から来ても感動するジャポニズムがここにあるという旧市街を作ったらいいと思います。これは番組が始まった頃からの持論です。

■ 良い街を創造するのに必要なことは何でしょうか

建築にもまちづくりににも天才を見出すことがとても大切です。そのためには、我々が見極める目を養わないとたとえ本物に出合ったとしても感応できません。

結局、誇らしく思うまちや街並みを考えないで漠然と何かが足りないと思い、誰かがやってくれるだろうと置いては駄目。幸せは歩いてこない、幸せは我々がつくるわけでしょう。現在の生活スペースを自分たちの手で天国にしなくてはなりません。そこが我々に足りないところじゃないでしょうか。

私の番組がきっかけで一般の方々が建築に興味を持たれ、それが上記のお役に立てば幸いです。

世界の歴史ある良質な都市には必ず旧市街が在ります。モータリゼーション、今の生活機能を取り入れたテーマパークではないリアルな生活の場としての日本的旧市街を創り上げたい。私の夢です。パリの旧市街があればこそ、新凱旋門付近のデファンスの新しい街とのバランスが取れるのです。親や古い友人を大切にする様に旧市街を創り大事にしたい。若い内が人生の中心ではなく、何れは老いる。老いた時の共通の話題としての旧市街であればと考えます。